学校だより

7月号

令和２年６月２５日
横浜市立三ツ沢小学校

「当たり前」と「ありがとう」

校長　重田　英明

せせらぎ緑道やあじさいロード、国道沿いには、色とりどりのあじさいの花が、行きかう人々に「わたしを見てー」と自己主張しているようです。例年なら、全校児童が体育館に集まってにぎやかに開催される“ほたピカる会”をかわきりに、各クラスで幼虫をお世話して“ほたるドーム”に放流、そして、“ほたる観察会”で多くの方々にホタルの放つ輝きを見ていただく時期です。しかしながら、今年は感染拡大防止策として観察会も中止となり、誰もいないドームの中で淋しく光を放ちながらホタルが舞っています。

一方、県をまたいだ移動の自粛が解除となり、人々の往来が増えて繁華街や観光地では少しずつ活気が戻ってきたようにも見えます。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大が収束したわけではなく、また、ワクチンや新薬の開発が急がれているものの、まだまだ時間がかかりそうです。

そのような状況の中ではありますが、段階的な学校再開の第三期として、7月より給食実施を伴う通常授業が始まります。学校では、給食の時間を含め学校生活全般において、これまで以上に手洗いを徹底し、飛沫感染、接触感染の防止に努めてまいります。ご家庭におかれましても、引き続きお子様の検温や健康観察をお願いいたします。

さて、私たちの日常生活や行動様式の中で、これまでの多くの「当たり前」が失われたように思います。そこで、この「当たり前」という言葉について少し調べてみました。

「当たり前」の反対語はどのような言葉だと思われるでしょうか。「ありがとう」という言葉なのだそうです。

日本で「ありがとう」という言葉が使われ始めたのは室町時代と言われており、その頃はまだ誰かへの“感謝の言葉”の意味としては使われていなかったそうです。「ありがとう」の語源は「有り難しこと」であり、“そこに存在するのが難しい”という意味なのだそうです。つまり“感謝の言葉”ではなく、“珍しくて貴重である”を表現するために使われていたというのです。このことから考えると、「当たり前」の反対語は確かに「ありがとう」だと言えます。相手のしてくれたことは「当たり前」ではなく、「有り難しこと＝貴重で稀で尊いもの」であるということから、次第に自分の身近にいる人への感謝の言葉として使われるようになったのでしょう。

このように、私たちがふだん家族や自分とかかわりのある人々に向けて様々な場面で使う「ありがとう」という言葉は、人が自分にしてくれたことの全ては“当たり前”なわけではなく、“本来はそこに存在することが難しい、ありがたい出来事”なのだということをあらためて知ることができました。

同時に、いたるところで「ありがとう」という感謝の言葉が飛び交うような三ツ沢小学校にしていきたいと思いました。